



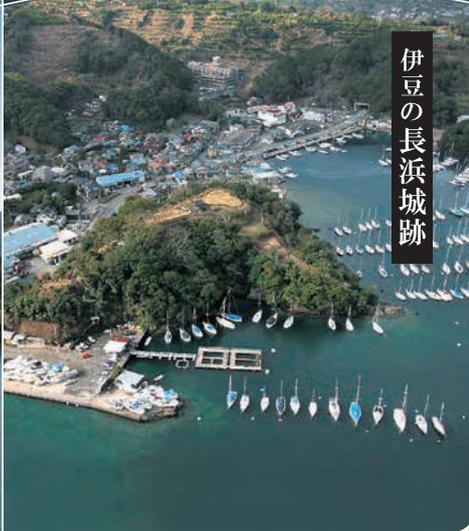
JAPAN HERITAGE
日本遺産



能島城跡



美可崎城跡

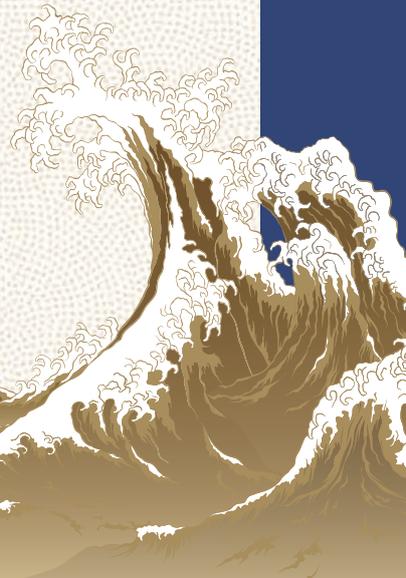


伊豆の長浜城跡



『日本遺産フェスティバルin今治 日本海賊会議』

中世日本の海賊と城Ⅲ 日本海賊会議



K A I Z O K U を世界へ

Contents

村上海賊 1

- 村上海賊三家…………… 1
- 因島村上氏とその城…… 2
- 海城を探訪する…………… 4

熊野海賊 6

- 紀伊半島の海の勢力…… 6

九鬼氏 8

- 伊勢志摩の海の勢力…… 8
- 九鬼嘉隆のふるさと…… 10

東国の海賊 12

- 西国海賊との違い…………… 12
- 伊豆長浜城…………… 14
- 江戸湾にも海賊がいた…… 16

ルイス・フロイスから「日本最大の海賊」と呼ばれた村上海賊のストーリーが平成 28 年 4 月に文化庁の日本遺産に認定されました。そして同年から平成 30 年にかけて、日本遺産魅力発信推進事業調査研究事業の一環として、村上海賊と全国の「海賊」やのちに「水軍」と呼ばれる海の勢力との比較研究を行ってきました。

調査の目的は、西洋のパイレーツや現代海賊とは異なる中世日本の海賊と城の特徴を明らかにし、日本の海賊 KAIZOKU の歴史文化を世界に発信するための基礎的な研究にあります。その成果は、調査報告書として刊行し、平成 30 年度から巡回展やシンポジウムなどで公開を始めました。そして、調査研究成果報告巡回展の第 3 弾として「日本海賊会議」を開催しました。

この企画展は、10 月 10 日・11 日に開催した「日本遺産フェスティバル in 今治」（会場：テクSPORT 今治）のプログラムである「日本海賊会議」と連動し、各地の海賊に関する遺跡やゆかりの品々をおもに写真パネルで紹介するものでした。そして、これらの取り組みの成果をまとめたのが本パンフレットになります。

日本独自の海賊 KAIZOKU への理解が深まり、その魅力を世界へ発信するきっかけになれば幸いです。

令和 3（2021）年 3 月
村上海賊魅力発信推進協議会

村上海賊三家

密集する島々や
その間を流れる激
しい潮流から、古
来より航海の難所

とも言われている芸予諸島。一方、船で瀬戸内海を東西に移動する船は必ず通らねばならない、海上交通の要衝でもありました。

村上海賊は、そのような芸予諸島を中心に十四世紀中頃から瀬戸内海で活躍した一族です。因島・能島・来島に本拠地をおいた三家からなり、連携と離反を繰り返しつつも、互いに同族意識を持っていました。戦国時代に来日した宣教師ルイス・フロイスは、瀬戸内海航路を支配した村上海賊を「日本最大の海賊（o major cossairo）」と称しています（ルイス・フロイス『日本史』）。

村上海賊は、よく「村上水軍」とよばれるように、戦時には海上での軍事活動に従事する「水軍」としても活躍しましたが、平時には自らのナワバリを通過する船から通行料を徴収することを生業としていました。時代は戦国。通行料の支払いに応じない船には容赦なく制裁を加えたでしょう。その一方で、通行料さえ収めれば、関所を無事に通過させるどころか、海賊が「上乗り」して水先案内や警固を行い、あるいは「過所船旗」と呼ばれる旗を渡して、津々浦々に潜む海賊から危害を加えられないよう、安全な通行を保障しました。ルイス・フロイスも「能島殿」からこの旗をもらったことが記録に残っています。

現在「海賊」と聞いて一般にイメージされるような、理不尽に船を襲って略奪を繰り返す西洋の「パイレーツ（Pirates）」や現代の海賊とは異なり、航海の安全を保障する活動も行っていた村上海賊。航海する者たちに恐れられる存在でありながらも、瀬戸内海交通の秩序を守るために不可欠な存在だったのです。そして海賊たちが戦時・平時における海上活動の拠点とし、自らのナワバリの象徴として築いたのが瀬戸に浮かぶ「海城」です。



「怪しい船に出会った時に見せるがよい」
（『フロイス日本史』より）
過所船旗受け渡し（イメージ）



▲尾道市史跡 美可崎城跡遠景

因島村上氏とその城

因島村上氏は、向島、因島およびその周辺に本拠をおいた村上海賊です。史料上、初めて姿を現すのは応永三十四（二四二七）年。赤松氏討伐への出兵に対して、室町幕府の将軍、足利義持が村上備中入道吉資にあてた感状です。

十五世紀中頃には、「備後海賊村上」（『満濟准后日記』）が備後国（現広島県東部）守護の山名時熙に遣明船の警固を命じられるなど、警固衆としても重要な役割を果たしました。また最近の研究では、室町時代から戦国時代初め頃には、その活動範囲を周防灘や伊予灘にまで広がっていたことがわかってきました。

戦国時代にはおもに芸予諸島近海で活動していた因島村上氏。一族の中でもっとも有名な人物が村上新蔵人吉充です。

吉充は、織田信長が送り出した水軍と大阪湾で戦った第一次木津川口合戦（天正四（一五七六）年）などで、毛利氏の一員として活躍しました。

また、吉充の弟である亮康は、鞆（現広島県福山市）を支配しました。鞆と言えば、室町幕府十五代将軍の足利義昭が下向してきた地ですが、亮康はその義昭から、「毛氈鞆覆」や「白傘袋」の使用を認められています。これらは、基本的に守護や守護代クラスの者しか許されないものであり、破格の待遇を受けていたことがわかります。亮康の拠点は、義昭の鞆城の近くにある大可島城（現在の圓



▼大可島城跡



青陰城跡 郭（曲輪）



広島県史跡 青陰城跡遠景



青陰城跡出土遺物 尾道市教育委員会蔵

▲太刀：年代不詳

◀（左から）土師質土器坏：15・16世紀

瓦質土器：15・16世紀

開元通寶：唐銭（初鑄621年）



青陰城跡から南側（四国方面）を望む

福寺)。少なくとも南北朝時代には小さな島だったことが、史料に記されています。

因島村上氏は向島や因島に多くの城を築きました。岬や鼻、湾に面した丘陵上に築かれるのが一つの特徴ですが、背後の山城とセットで本拠地としているケースもあります。近年刊行された『新尾道市史文化財編』を参考に代表的な二つの城跡を紹介しましょう。

鼻の頂部に築かれた美可崎城（市史跡）は郭（城の平坦面）が一つだけの小規模な城郭ですが、「船隠し」と呼ばれる入り江を見下ろす位置にあり、尾根筋には本格的な切岸（急峻な崖）が造られるなど、規模の割に重要な役割を担っていたと考えられています。

青陰城（県史跡）は、標高二七七㊦の青影山山頂に築かれた山城。山頂西側に本丸と呼ばれる主郭があり、芸予諸島を一望することができます。主郭の東側に二の丸とされる副郭があり、土塁、切岸、浅い堀切の痕跡も確認できます。遺構の残りが良好であると考えられ、過去には太刀や生活の土器類などが発見されています。

◇参考にしたおもな本

尾道市市史編さん委員会編『新尾道市史文化財編』（尾道市、二〇一九年）

鞆の浦歴史民俗資料館編『特別展 鞆幕府將軍足利義昭―瀬戸内・海賊・水軍―』（同館、二〇二〇年）



▲能島城跡出土遺物 今治市村上海賊ミュージアム保管

▲国指定史跡 能島城跡遠景

能島城

は、大島沖（今治市）にある能島（周囲約八五〇メートル）と鯛崎島（約二五〇メートル）の二つの小島全体を城郭化した城で、全国的にも珍しく、「海城」などと呼ばれています。

標高約二五メートルの能島は、全体を三段に削って、あるいは一部を盛土によって、郭（曲輪）と呼ばれる平坦面を造っています。上から本丸（郭Ⅰ）、二之丸（郭Ⅱ）、三之丸（郭Ⅲ）、そして東側と南側に張り出した鼻には出郭、また南東側には海岸を埋め立てた広い郭（南部平坦地）があります。鯛崎島にも郭があり、能島城の一部として東の海域の監視などに利用されたと考えられています。

能島城には、防御性の高い山城に見られるような複雑な虎口（郭への出入口）、土塁、堀切、堅堀などは発見されておらず、切岸と急峻な崖に囲まれただけの簡素な縄張り（防御構造）です。海面や激しい潮流によって守られた「天然の要塞」とも言われています。確かに、最大十ノット（時速約十八メートル）の潮流や、海中に潜む岩礁などは敵にとってはやっかいな防御施設。しかし、約六時間おきの潮止まりや潮流の穏やかな小潮もあるため、常に完璧な守りだったとは言えません。この地で育まれた巧みな操船技術や、地の利を生かした戦略を駆使して、能島城を守っていたと考えられます。

一方、海岸部には船を繋ぐための設備があり、発着の利便性を高めています。海に対して開放的な構造から、戦への備えはもちろんのこと、それ以上に、海を舞台とした海賊たちの日常活動の拠点であったと考えられます。その証拠に、何度も建て替えられた掘立柱建物の痕跡や、膨大でバリエーション豊かなくらしの道具が発見されています。

「海城」を



▲文化的側面を示す道具

能島城跡出土遺物 今治市村上海賊ミュージアム保管

暮らしの道具▶



▼岩礁ピット（船繋施設）



▼船だまりと切岸の役割を果たした急峻な崖





▲国指定名勝波止浜 来島城跡遠景

探訪する

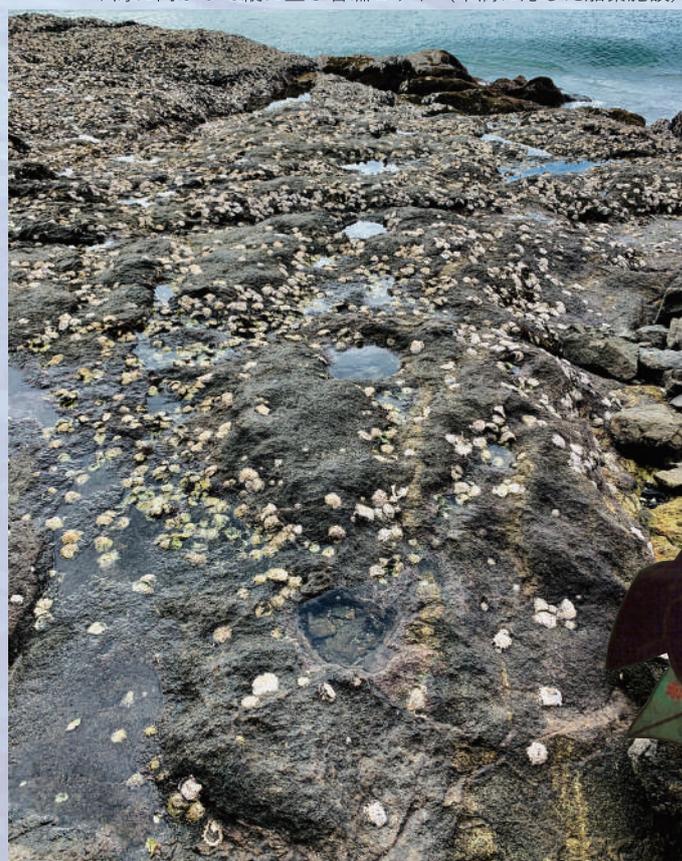
来島城

は、小島全体を城郭として利用した海城で、海の難所である来島海峡の今治平野側を押さえる位置にあります。城主は来島村上氏。古文書に初めて姿を現すのは、天文十（一四五二）年で、発掘調査で出土した品々の年代も概ね合致します。伊予国守護である河野氏の支配下の城として、当時の争乱の舞台になっていました。来島城に村上氏が在城していたことが史料上で確認できるのは、もう少し下った大永四（一五二四）年。同氏が慶長六（一六〇二）年に豊後国森（現大分県玖珠町）に移る頃まで使用されました。

能島城と同様に来島城の対岸には「水場」があり、城の岩礁部には岩礁ピット、自然地形を活かした郭、年代は不明ですが立派な石垣が一部に残されています。生活に使われた土器や陶磁器も発見されました。ただ十分な発掘調査が行われていないため、城の実態についてはまだまだ多くの謎があります。

一方、天正十一（一五八三）年の「来島落城」を伝えた古文書（『石谷家文書』）が近年新たに発見されました。今後の研究の進展が期待される城郭の一つと言えます。

▼海に向かって縦に並ぶ岩礁ピット（干満に応じた船繫施設）



◀村上通康（父）

村上通総（子）▶



来島村上氏肖像画
安楽寺蔵

熊野海賊

— 紀伊半島の海の勢力 —

村上海賊の一つ、能島村上氏が史料上に姿を現したのは貞和五（二三四九）年のこと。遡ることその二年前、東福寺城という南北朝時代の山城が「熊野海賊」に襲われました。「熊野」は、紀伊半島南部一帯（現在の和歌山県田辺市以南から三重県尾鷲市）を指します。驚くことに、熊野海賊が襲撃した東福寺城の位置は、遠く離れた九州の薩摩。現在の鹿児島市です。熊野海賊はその活動範囲を南九州まで広げていたことがわかります。

南北朝時代、瀬戸内海で勢力を誇っていたのは、忽那島（現松山市中島）を本拠とした忽那氏。熊野海賊と緊密に連携して、後醍醐天皇の皇子、懐良親王ら一行の九州渡海を助けたと言われています。当時の熊野海賊は、紀伊水道はもちろんのこと、大阪湾、瀬戸内海、南九州まで活動海域を広げています。それぞれの地名を冠する熊野の武士たちが歴史の表舞台に登場してきたのもこの頃でした。

室町・戦国時代になると、海域での広域活動はやや影を潜め、それぞれの本拠において整備が進み、おもに紀伊国内で活動したようです。

熊野を象徴する領主は、日置川河口部の安宅荘に本拠を置いた安宅氏と、同川中流域の三箇荘久木や古座川河口部西向浦の小山氏で、いずれも海の勢力として活動しました。そしてこの両家には、鎌倉時代から戦国時代までの貴重な中世文書が現代に伝えられ、近年、その調査・研究が進展しました。

これらの豊富な史料とともに、日置川河口には、安宅氏によって築かれた城館跡が良好な状態で残



古座川の河口（山内譲氏提供）

されています。長年の発掘調査の成果が実を結び、令和二（二〇二〇）年三月、「安宅氏城館跡」は国の史跡に指定されました。

安宅氏居館跡は、紀伊山地から河川を利用して運ばれる物資の集積地である日置浦の管理に適し



▲安宅氏城館跡全景（白浜町教育委員会提供）

た場所にあります。また東西を結ぶ海上交通の要港でもありました。その証拠に、居館跡からは近畿や東海からもたらされた土器などがまとまって出土しています。

さらに安宅氏居館跡の日置川をはさんで対岸に位置する長寿寺には、暦応五（一三四二）年の銘が入った備前焼甕が伝世しています。備前焼の流通など瀬戸内との交易に安宅氏が関与していた可能性が考えられます。このように安宅氏城館跡は、水陸双方の交通に深く関与した熊野の領主の姿を象徴する貴重な史跡と言えるでしょう。

村上海賊が台頭する少し前。熊野信仰の広がり背景に、瀬戸内海を超えて遠く離れた薩摩にまで活動範囲を広げていた「熊野海賊」。そのふるさとは、その歴史を物語る文化財が数多く残されています。

ちなみに熊野に拠点を構え、割拠する武士は後に「熊野水軍」と呼ばれ、一般に知られていますが、当時の史料には「熊野衆」「熊野海賊」「熊野悪党」などの呼称を見ることができます。

◇「熊野海賊」で参考にしたおもな本

坂本亮太編『春季特別展 戦乱のなかの熊野―紀南の武土と城館―』（和歌山県立博物館、二〇二〇年）
高橋 修編『熊野水軍のさと』（清文堂、二〇〇九年）
山内 譲『海賊の日本史』（講談社現代新書、二〇一八年）

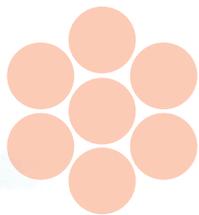
など

九鬼氏 — 伊勢志摩の海の勢力 —

九鬼氏は、紀伊国牟婁郡九鬼浦（現三重県尾鷲市九鬼町）に由来する一族とされ、室町時代に志摩国泊浦（現鳥羽市）に進出するまでは、波切城（砦）（現志摩市大王町）に拠点を置いていたとされます。志摩国の在地領主らは、伊勢神宮より「嶋衆中」と呼ばれ「二揆」を形成していました。十五世紀後半には、嶋衆は警固料を徴収していたとみられています。その一人である相差能景は、「船公事」（税）として積み荷を徴収していたらしく、その警固料をめぐって伊勢神宮との争いもあったようです。この頃の警固料の確認には、「札」と呼ばれる通行証が用いられていたことが史料から読み取れます（『三重県史』資料編中世1（上）・通史編中世）。嶋衆の一人であった九鬼氏が志摩国の有力な海の勢力への成長したのは嘉隆の時代、つまり十六世紀の後半になります。近世初期に記された『勢州軍記』などによると、九鬼氏を含む志摩国の海辺の領主たちは「七人衆」などと呼ばれ、伊勢国司であった北畠氏の支配下がありました。

永禄十二（一五六九）年、織田信長の二男・信雄が北畠具教へ養子として入り、天正三（一五七五）年、北畠家の家督を相続します。そして翌年には、信雄は北畠具教らを誅殺（罪をとがめて殺すこと）します。このように織田家一族が伊勢・志摩国を支配していく過程において、九鬼嘉隆は信雄の家臣として活躍し、十六世紀末には志摩国の有力武士を従える地位へ成長したと考えられています。一方で、志摩を離れる九鬼氏の対抗勢力もいました。武田氏の海の勢力として後に北条氏の海の勢力と対峙する小浜氏などがそうでした。

九鬼氏を「海賊」と呼称する当時の史料は見られませんが、織田方の「水軍」としての活躍や大型船の造船技術を背景として、強大な海の勢力に成長したと考えられます。豊臣秀吉の小田原北条氏攻めにおいては、総勢二万六三〇の西国の船手衆がこの伊勢・志摩に集結しました。秀吉は、加藤嘉明や脇坂安治に対し、この海上に詳しい九鬼嘉隆に相談するよう指示していることから、九鬼氏が豊臣船手衆の主力を担っていたことがわかります。



波切城跡（鳥羽市教育委員会提供）

また九鬼嘉隆は、朝廷に鯨二桶を献上し、織田信長には海老一折を送っていたことが史料に記されていました。古くから捕鯨が盛んであり、海の幸に恵まれた伊勢志摩の領主にふさわしい贈りもので、平時の生業や地域の産物を知ることができます。

右傳之傳以欽記此篇瑞三爾正法宋元泉漢史元瑞白

所謂升高賦者項其示見義物者貴依其本定有以哉於予茲筆深
 本其寶匪李匪寶覽者無信哉武開韓師富太守之於域中而註知太守
 紀之公景仰太守而誠欽願孫不可勝言矣且夫閱韓師之贊話宜
 桂常安之於菊室欽主太守功業備於後生矣像以會畫師贊保予
 故歷七十有餘之呈霜茲歲寬文二十壬子暮春日寫這像贊以
 藤原隆季公踐前隅列太守之玄蹟獨九鬼家之魯靈光也

時慶長丁未仲冬日前任東福後任南禅文英史清韓燒香拜讚

十子萬孫奇山最尊最上福海無邊無量

於諸郎

空希

門必有忠臣之彰擅生擅技貽餘董於令嗣蘭生蘭葉聯餘芽
 熟峯之直指深了本地風光積善之家必有餘慶之至孝子之
 三綱致誠於佛木崇鸞願之化法石修風去淨業傾心於禅要語
 王是國其國家其家其學其善其德其德其道其道勤立常奉
 寢清香執射則規提齒鐵中蛇飛衛執御則度越取響韓良
 歌臺暖馨舞殿冷袖講武論文玩常氏品藻兵衛畫執燕
 中冠於南紀胡又進水上軍於樂浪移風易俗擬毛氏雅音
 抱駿萬斛中重玉樓金殿鷄首十艘上分牙插錦纜匪雷討海
 蕩、風行率愜意氣堂、大兵大功大智大智十戰十勝十言十當
 前隅列太守恭史常安大居士寬仁大度平生屈強而洗花鮮儀相
 光君德澤幸得去後昆蔭家 共惟

志別刺史前隅列太守恭史常安大居士像之贊



◀九鬼嘉隆肖像画
 常安寺蔵
 寛文12(1672)年
 鳥羽市指定文化財

茶会に頻りに参加し、自らも主催するなど、文化人としての顔も。





▲三重県指定史跡 鳥羽城跡全景（鳥羽市教育委員会提供）

九鬼嘉隆のふるさと

天正十（一五八二）年の本能寺の変により信長が斃れた後、九鬼嘉隆は来島兄弟（得居通幸・村上通総）らとともに、秀吉直属の船手衆として、九州島津氏攻めや小田原北条氏攻め、文禄の役（壬辰倭乱）などに参戦しました。

その頃に安堵された本拠地が三重県の鳥羽であり、この地には四方を海と水路で囲まれた海の城、鳥羽城跡（三重県指定史跡）をはじめ、九鬼嘉隆ゆかりの文化財が多く残されています。

慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原合戦。九鬼嘉隆は西軍、息子守隆は東軍と、父子が分かれて戦ったと言われています。西軍が敗北すると嘉隆は、最期の地を求めて答志島へ渡りました。子の守隆は父の命を救うべく、徳川家康に懇願しこれが認められましたが、その報せを待つことなく、嘉隆は洞泉庵にて切腹したと言われています。洞泉庵のある答志島和具には、九鬼嘉隆の胴塚と首塚（三重県指定史跡）が残されています。

◇「九鬼氏」で参考にしたおもな本

- 黒嶋 敏 『海の武士団 水軍と海賊のあいだ』（講談社、二〇一三年）
- 豊田祥三編 『九鬼嘉隆 戦国最強の水軍大将』（鳥羽市教育委員会、二〇一一年）
- 山内 譲 『海賊の日本史』（講談社、二〇一八年） など





▲九鬼嘉隆胴塚

◀九鬼嘉隆首塚

三重県指定史跡

▼九鬼家の廟所

常安寺本堂裏

鳥羽市指定文化財

(鳥羽市教育委員会提供)



東国の海賊

—西国海賊との違い—

最近の研究によると、戦国時代における「海賊」の意味が、東と西とではだいぶと違うことがわかってきました。

村上海賊は、海戦で活躍する一方で、平時には通行料を徴収することを生業とし、その見返りとして安全を保障するものの、「賊」的なニュアンスは残っていました。

一方、駿河湾・相模湾・江戸湾などで活動した東の海賊は「賊」的なニュアンスがほとんどなく、大名の指示に従って、海上軍事力を発揮する海の武士団のことを「海賊」と呼ぶようです。古文書には「海賊の儀」を仰せつける、「海賊の奉公」を勤めるなどの表現が見られ、その軍事行動に赴く船を「海賊船」とも言いました。

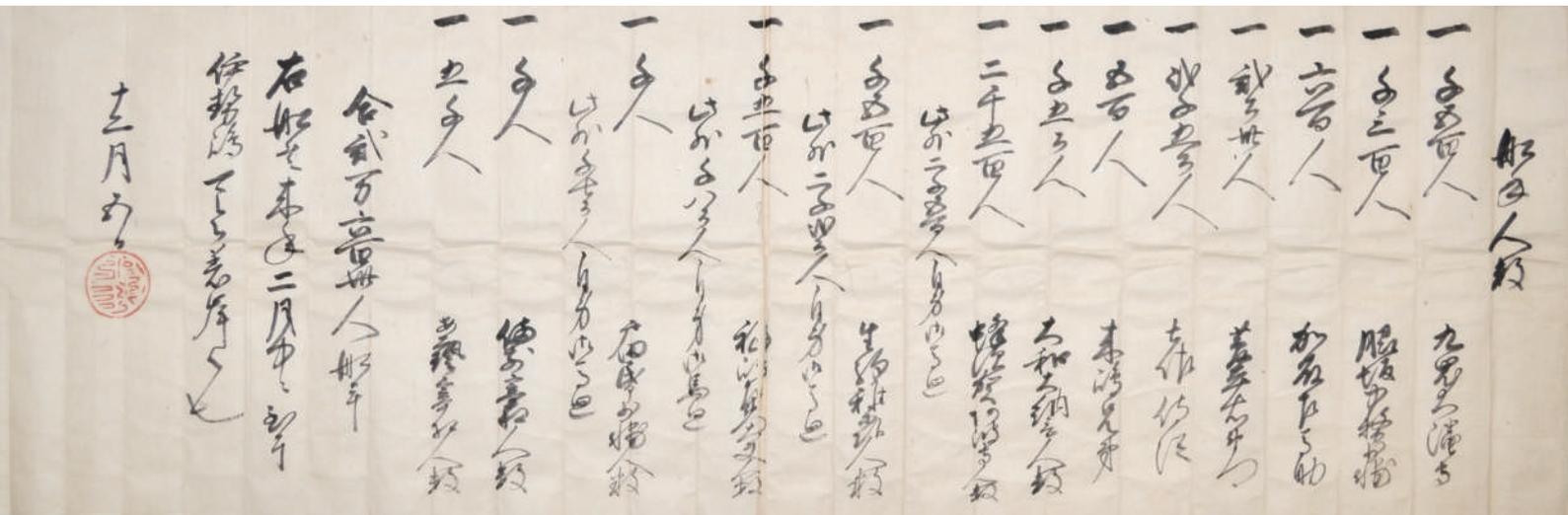
海賊の戦法も西と東では違いがあるようです。村上海賊は「ほうろく火矢」などを用いた海上での戦法を得意としましたが、東国では、「敵船と出会い、勝利を得、風（富）津浦へ追い上げる」であるとか「佐貫前で房州海賊と掛け合い、佐貫浜陸地へ押し上げ」（『越前史料所収山本文書』）といったように、最終的には、陸地で決着がつけられていたようです。また「のろし」に関する史料が残されており、敵船の発見を本城へ伝達するための具体的な手段を知ることができます。

天正十八（二五九〇）年の秀吉による小田原城攻めでは、九鬼嘉隆や来島村上氏らが、秀吉の「船手」（いわゆる「水軍」）として参戦しました。この船手のことを北条氏政は「西国海賊」と呼んでいます。海賊の海軍の武士団と捉える東国の認識がよく示された表現と言えるでしょう。

ちなみに秀吉方の来襲に備えて最も重視された城は、伊豆半島の南端にある下田城でした。城主は清水康英でしたが、守りを固めていく中で、北条氏の海の主力である梶原景宗を入城させようとしたものの、梶原と清水の意見が合わなかったよう

▼伊豆 下田城遠景





▲ 久留島家文書 豊臣秀吉朱印状（個人蔵） 天正 17（1589）年 12月5日付

- 船手人数**
- 一、千五百人 九鬼大隅守
 - 一、千三百人 脇坂中務少輔
 - 一、六百人 加藤左馬助
 - 一、式百卅人 菅平右衛門尉
 - 一、式千五百人 土佐侍従
 - 一、五百人 来嶋兄弟（伴春通幸・村上通徳）
 - 一、千五百人 大和大納言人数
 - 一、二千五百人 蜂須賀阿波守人数
 - 此外二千五百人 自身御馬廻
 - 一、千五百人 生駒雅楽頭人数
 - 此外二千式百人、自身御馬廻
 - 一、千五百人 福嶋左衛門大夫人数
 - 此外千八百人、自身御馬廻
 - 一、千人 戸田民部少輔人数
 - 此外千七百人、自身御馬廻
 - 一、千人 備前宰相人数
 - 一、五千人 安芸宰相人数
 - 合式万六百卅人船手
 - 右船共、来年二月中二至于
 - 伊勢・嶋、可令着岸候也、
 - 十二月五日（朱印）（豊臣秀吉）

です。城主の意向を尊重して、梶原は東浦に移動させ、大半は「小田原之川（早川か）」に引き揚げさせることになりました。

なお、瀬戸内海と同じように、東国にも「上乗り」という言葉があります。ただその役割は少し違って、村上海賊の上乗りが通行料・警固料と引き換えにボディーガードや水先案内人を行うのに対し、北条氏が出した朱印状にみる「上乗り」は、船の積み荷の見張りとして乗っていく人のことでした。

具体例を挙げれば、北条氏康の娘と今川氏真の祝言の費用という「大事之荷物」を見張るために、上乗りを命じられています。大事なもので念には念を入れていたのでしょう。少しでも怠慢があったら、上乗りの頸を切るとも書いてあります。

東国の海賊は、いわゆる「賊」としての顔がほとんど見られない、海の武士団とも言える人々であることが明らかになりました。

明治時代の小笠原長生海軍中将は、南北朝時代以降、政府や大名の軍事勢力として利用された「海賊」のことを「水軍とみなさねばならない」としています。東国の海賊の中には、北条氏や武田氏の海上軍事勢力、いわば戦国時代の「水軍」の役割を果たした海の領主たちが存在していました。

では、「水軍」の拠点とも言える北条氏領国の海辺に築かれた城とは、どのようなものだったのでしょうか。

◇「東国の海賊」で参考にしたおもな本

木村 聡編『国史跡長浜城跡整備事業報告書』（沼津市教育委員会、二〇一六年）
 真鍋淳哉『戦国江戸湾の海賊 北条水軍VS里見水軍』（戎光祥出版、二〇一八年）
 山内 讓『豊臣水軍興亡史』（吉川弘文館、二〇一六年）
 山内 讓『海賊の日本史』（講談社、二〇一八年） など

伊豆長浜城——北条氏に従った海の勢力の城——

長浜城（現静岡県沼津市）は、伊豆半島の付根付近、駿河湾の最奥部の内浦湾に突き出した標高三三呎の鼻の頂部に築られました。内浦湾は西側の長井崎と淡島に囲まれて、常時波が穏やか。富士山が見える北北西の方向に敵対する武田氏の城郭を望むことができます。

山側には土塁や複雑な虎口（入口）空間、障子堀で守りを固め、一方、海側は切岸は見られるものの、開放的で眺望が利く構造になっています。村上海賊の城のような、接岸施設を持ち、全体が開放的な構造とは異なり、技巧的な縄張り（防御構造）に特徴があると言えます。小田原北条氏自らが軍事的緊張に際して築城を指示したといい、この点が城の構造にも反映されているのでしょう。

対武田戦に備えた城とされ、一五七九（天正七）年の文書には「長浜に船掛庭（船着場）を普請した」とあることから、普請の目的は軍船停泊場の整備であったと考えられています。

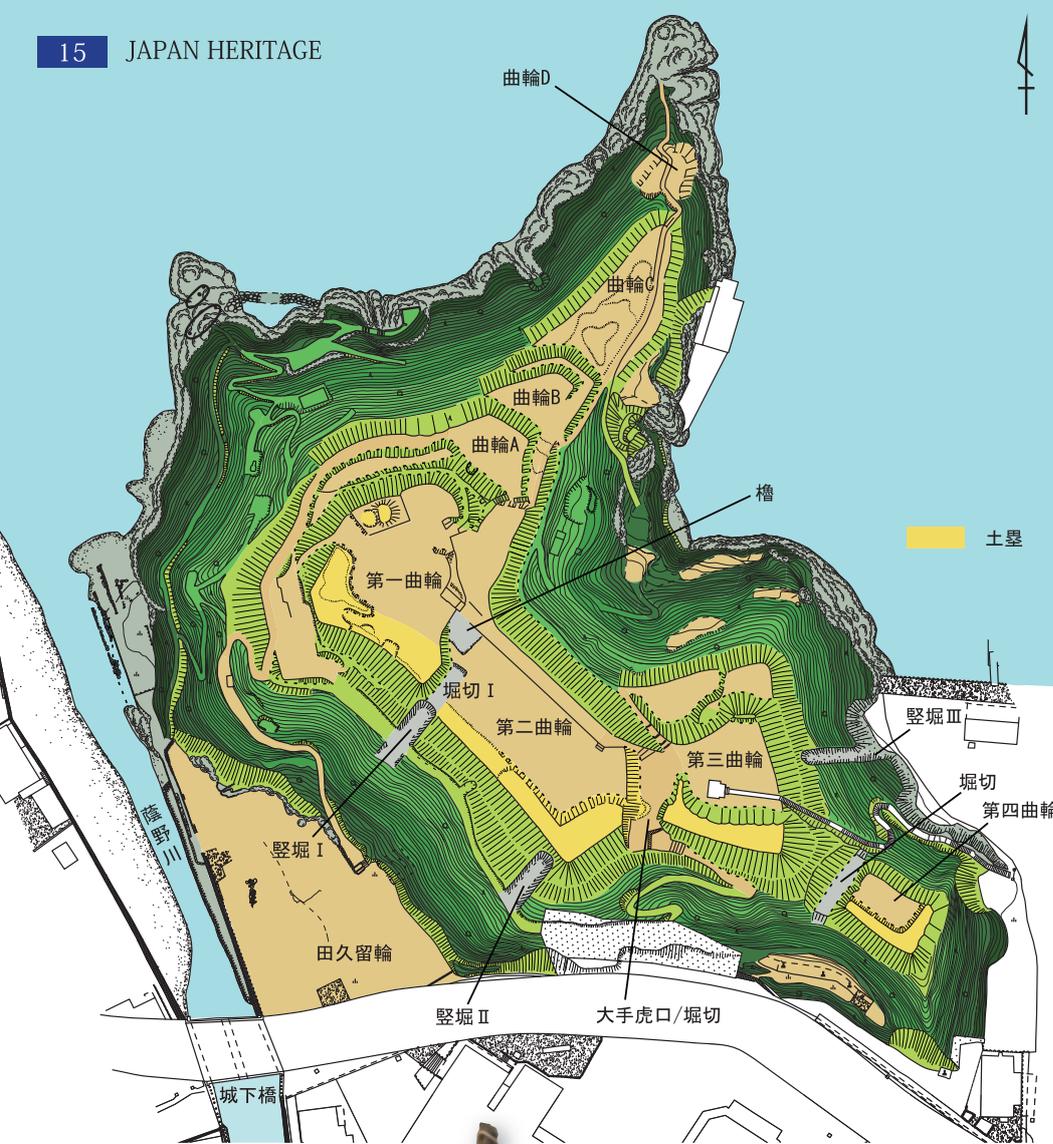
ただし、発掘調査によって十五世紀後半にまで城の利用がさかのぼることが判明したため、一五七九（天正七）年には、城の防衛施設が改修され、新たに船着場が整備されたと考えられています。

この城に入ったのは、紀伊国出身の海賊、梶原景宗でした。傭兵として北条氏に招かれた梶原氏は三浦半島に多くの所領を与えられ、江戸湾で里見氏と戦いましたが、武田氏との緊張の高まりにより、駿河湾に派遣されます。この浦に安宅船と思われる大型船が備えられました。漕手の養成においても海賊たちがその役割を担ったのでしょう。

東国では、大名の水軍として活躍する海の武士団のことを「海賊」と呼んでいたと先に述べましたが、さらに、梶原氏は紀州との商売に関わるなど、「商人」の顔もあったことが指摘されています。

▼伊豆 長浜城遠景（沼津市教育委員会提供）





▲伊豆長浜城跡概念図
(沼津市教育委員会提供)

▲(上) 第二曲輪 復元的整備
手前：掘立柱建物 奥：櫓
▲(中) 発掘調査で発見された櫓跡
▲(下) 堀切I
(沼津市教育委員会提供)



◀安宅船木製模型 東京都指定有形文化財 八王子市金龍山信松院蔵
金龍山信松院に伝わる安宅船模型。信松院は、武田信玄の第六女、松姫が開いたと伝わる。同院所蔵の正徳4（1714）年の「軍船之記」には、松姫の実家である仁科家が家臣に命じて文禄・慶長の役で使用された軍船二艘の木製模型を造らせて同家の家伝としたと書かれている。慶長5（1600）年に松姫のもとに預けていたが、その後仁科氏は模型を携えて西国へと移った。その後、突然の変事で模型が失われることを恐れた仁科氏が、信松院に納めたという（「信松院文書」）。武田氏と対峙した北条氏の大型船もこれに類似した形態・構造だったのだろうか。

(背景は伊豆半島からみた駿河湾)

江戸湾にも

海賊がいた

戦国時代に関東で活動した海賊の実態が徐々にわかってきました。近年の研究に依拠して、江戸湾の海賊について紹介しましょう。

戦国時代、三浦半島の北条氏と房総半島の里見氏が江戸湾を互いににらみ合っていました。北条氏の海の勢力の中心は、山本氏と梶原氏。山本氏は伊豆半島を本拠とし、紀伊国から備兵として配置された梶原氏は、三浦半島に所領の多くをもっていました。

江戸湾における攻防の重要な拠点となったのは浦賀城（現神奈川県横須賀市）や三崎城（現三浦市）など、海に面した城でした。

瀬戸内海では、山内讓氏の定義により、能島城や来島城など島全体を城郭化した城を「海城」とし、それに三方を海に囲まれた岬の先端に築かれ、接岸施設などを持つ城をそれに含むかどうかが議論されています。一方で、網野善彦氏の「海の領主の拠点」「岬に構えられ、海に対する警固所・関所としての役割と防御機能をもった城郭」を広く「海城」とする見方もあります。網野氏の定義に従うと、浦賀城も江戸湾を望む「海城」であり、里見氏側にも多くの「海城」が沿岸に築かれていたことがわかります。浦賀を拠点とする海賊として、北条氏の史料には「浦賀定海賊」「浦賀海賊」とあり、里見氏側にも「房州海賊」や「海賊大将」などが確認できます。江戸湾は海賊たちが勢力を張る海だったのです。

ただしこれらの海賊は、必ずしも船や積み荷の略奪を繰り返す集団ではありませんでした。真鍋淳哉氏によると、江戸湾の海賊の性格は、戦時は「海上武力の行使者」、「水軍」であり、平時は漁業や運送業を生業とする人々であったと考えられています。

中世の日本には、「海賊」やのちに「水軍」と呼ばれた海の勢力が多く存在することがより明確になってきました。そして、西洋のプライベートとは同一視できないだけでなく、さらに西と東、時代によってもその性格が多様であることが見えてきました。

◇「江戸湾の海賊」で参考にしたおもな本

真鍋淳哉『戦国江戸湾の海賊北条水軍VS里見水軍』（戎光祥出版、二〇一八年）



▲浦賀城跡遠景（真鍋淳哉氏提供）

背景 久里浜港付近から見た房総半島（真鍋淳哉氏提供）

▼戦国江戸湾周辺の主要城郭

（真鍋淳哉著『戦国江戸湾の海賊』17頁を基に作成）



「海賊」やのちに「水軍」などと呼ばれた 中世日本のおもな海の勢力

—日本遺産魅力発信推進事業で研究対象とした海の勢力を中心に—



- このパンフレットでおもに取り上げた海の勢力
- その他のおもな海の勢力

このパンフレットは、日本遺産魅力発信推進事業の一環で開催された巡回写真展『中世日本の海賊と城Ⅲ日本海賊会議』（会場：今治市村上海賊ミュージアム、因島水軍城、おのみち歴史博物館）および『日本遺産フェスティバル in 今治 日本海賊会議』における各パネリストの発表内容（レジュメ）を踏まえて作成しました。執筆・編集は、日本海賊会議パネリスト（下記）および西井亨（尾道市文化振興課学芸員）、松花菜摘（今治市村上海賊ミュージアム学芸員）の協力のもと、田中謙（同学芸員）が担当しました。

【日本遺産フェスティバル in 今治 日本海賊会議】

コーディネーター 山内 譲（村上海賊魅力発信推進協議会）

パネリスト 田中 謙（今治市村上海賊ミュージアム）「村上海賊」
坂本亮太（和歌山県立博物館）「熊野の水軍・海賊」
豊田祥三（鳥羽市教育委員会）「伊勢志摩の海賊衆について」
真鍋淳哉（青山学院大学）「伊豆半島・房総半島の海賊（関東の海賊）」

また、一連の事業を行うにあたり、下記の機関より種々のご教示・ご協力を賜りました。個人名につきましては、掲載を控えさせていただきますが、ご協力をいただきました方々に心より感謝申し上げます。

安楽寺、宇和島市・宇和島市教育委員会、国文学研究資料館、常安寺、白浜町教育委員会、信松院
鳥羽市教育委員会、沼津市・沼津市教育委員会、和歌山県立博物館

おもな参考文献等は市販本を中心に本文中に記しておりますが、その他は紙面の都合上、割愛させていただきました。なお、本パンフレットの掲載写真・図等の二次利用はご遠慮ください。

日本遺産村上海賊 ビジターセンター位置図



因島水軍城

《営業時間》9:30 ~ 17:00 (木曜休館)
《観覧料》大人 330 円 小人 160 円
尾道市因島中庄町 3228-2



来島海峡展望館

《営業時間》9:00 ~ 18:00
《観覧料》無料
今治市小浦町二丁目 5-2



村上海賊ミュージアム

《営業時間》9:00 ~ 17:00 (月曜休館)
《観覧料》大人 310 円 学生 160 円
高校生以下・18歳未満 (無料)
今治市宮窪町宮窪 1285



発行元：村上海賊魅力発信推進協議会

事務局：【尾道市企画財政部文化振興課】

〒722-8501 広島県尾道市久保一丁目 15-1

TEL0848-20-7425 E-mail: bunkazai@city.onomichi.hiroshima.jp

【今治市教育委員会事務局文化振興課】

〒794-0027 愛媛県今治市南大門町二丁目 5-1

TEL0898-36-1608 E-mail: bunka@imabari-city.jp



日本遺産村上海賊公式 WEB サイト
murakami-kaizoku.com